

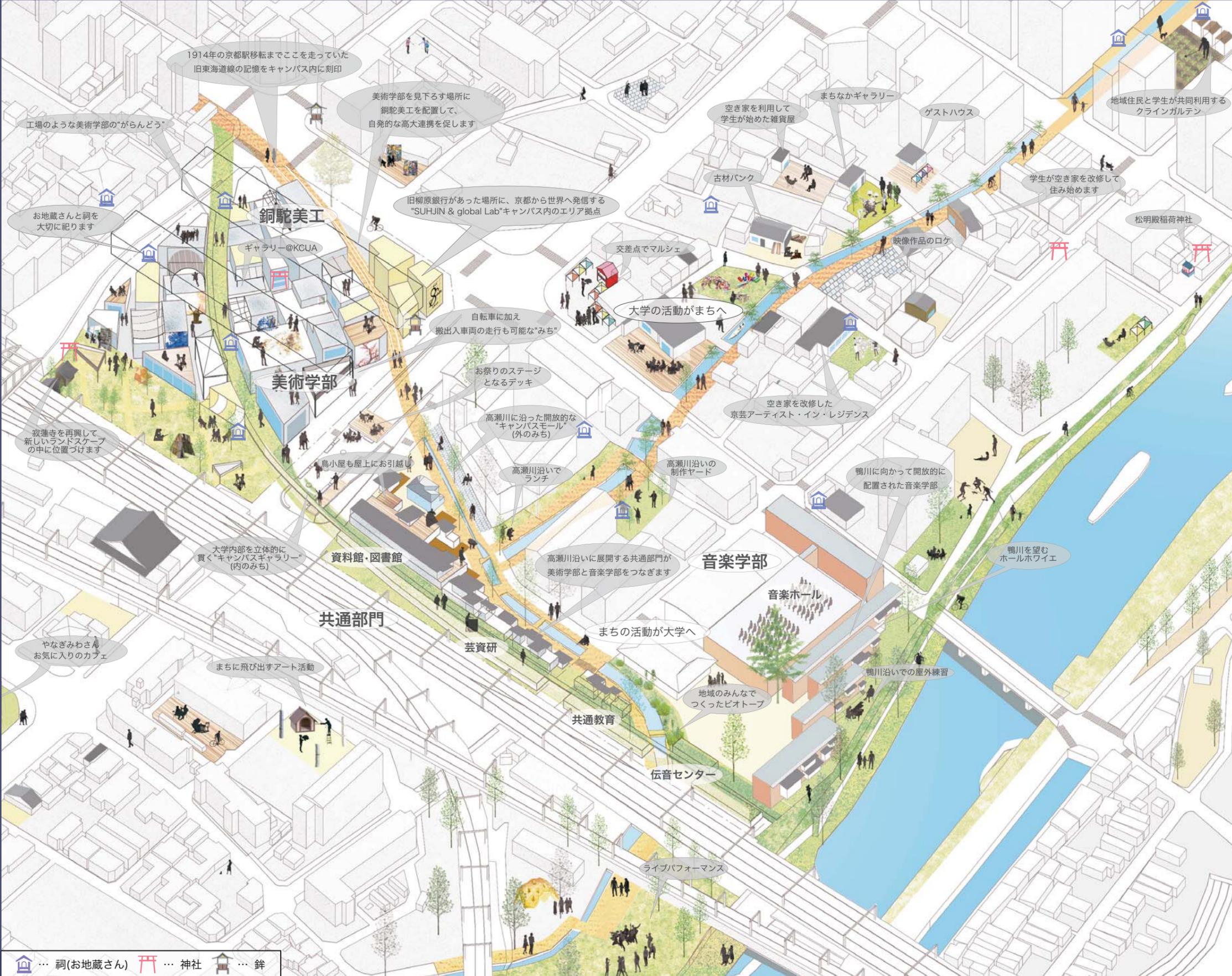
テーマに対する技術提案



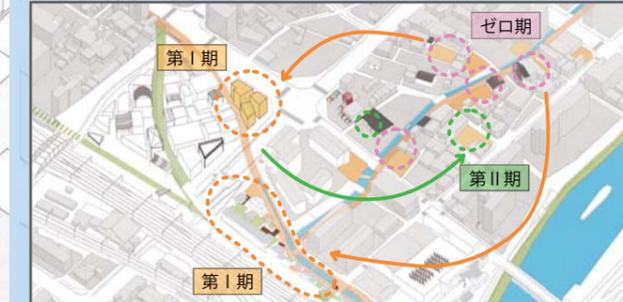
みちばた芸大、どこでもテラス

“キャンパスづくり”は“まちづくり”

“みち”を媒介にして大学内外の様々な人々が参加して変化し続ける、小さな場が連続した有機的ネットワークのようなキャンパスを提案します。



高瀬川から始まる、キャンパスづくり=まちづくりのフレーム



[大学と協働して設計をひらく]

リノベーションセンターを立ち上げる

- ① 大学ですでに実践されているまちのアーカイブづくりやリサーチ活動と協働
大学建設にともない激変するであろう、現在のまちのアーカイブを大学やアーティスト、地域住民と協働で構築します。
- ② 地域とつながる。世界とつながる
国内外様々なゲストを招聘したイベント等の開催により、大学の設計をひらいていきます。
- ③ 大学教員と学生と共に社会実験を行う
まちなかに点在する場所や建築を舞台とした実験的な試みを通じて、まちの使い方を徐々に拡張していきます。
- ④ 卒業生を巻き込む
京芸の卒業生がアトリエとして利用できる場所づくりなど、卒業後も継続的にまちへ参画できる仕組みをつくり出します。



[まちなかでの活動を大学へ取り込む]

"SUHJIN & global Lab" ~積極的にまちと連携しながら、世界へ発信する拠点づくり



地域での活動や情報を収集し発信する拠点として、ゼロ期で継続してきたまちなかでの活動を引き継ぎます。

[大学での活動をまちなかへ展開する]

"みちばた"での実践をまちに還元する



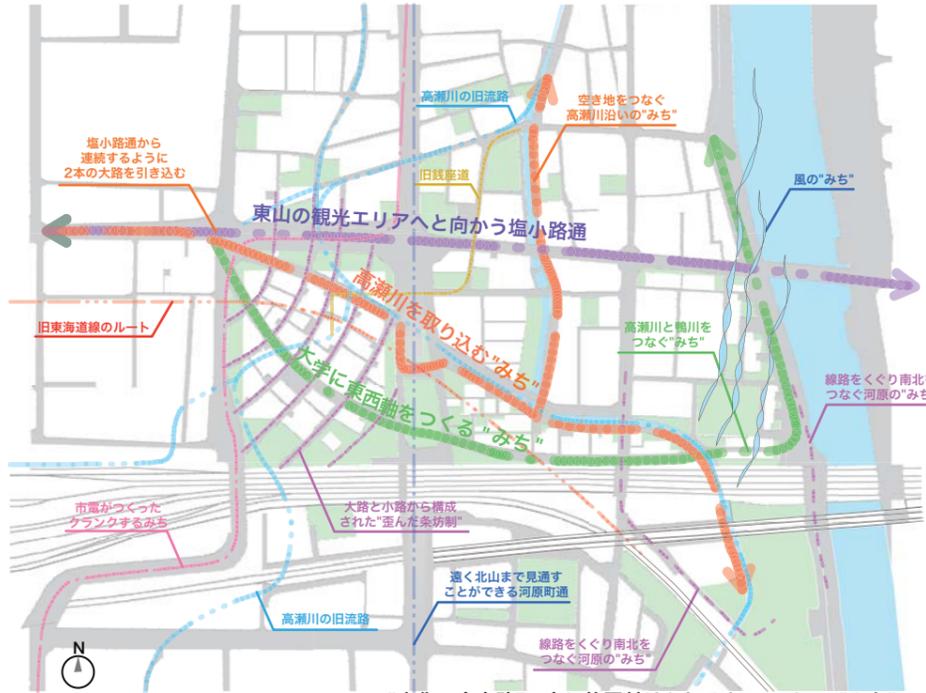
新しい大学内で起こる様々な試みをまちなかへ拡張します。

テーマに対する技術提案

テーマ①: キャンパス計画のフレームについて → 基本コンセプト“Terrace”としての大学を実現するための4つのフレームワークを提案します。

“みち”のフレームワーク ~多様な“みちばた”をつくる~

- 地域と京芸、京芸と銅駝美工、あるいは学科間や学部間など多様なつながりをつくる骨格となり、キャンパスに有機的な秩序を与える“みち”を、最も重要なフレームワークとして位置づけます。
- まちを歩くように楽しむことができる“みち”のネットワークが、人と空間と活動を紡ぎ、多様な“みちばた”をつくり出します。



＜“文化の十字路”の中に位置付けられるキャンパスの“みち”＞

“庭”のフレームワーク ~キャンパスの地形をつくる~

- 敷地の内外を問わず“みち”に沿って、様々な活動のための“火床”となるテラス (terrace) を散りばめて、キャンパスの地形 (terrain) を造形し創作活動や交流・発信の場となる多様な“庭”を整えてゆきます。
- 敷地条件や周辺環境に基づき、京都駅に近くより活動的なC街区には主に美術学部が、鴨川に開け落ち着いたA街区には主に音楽学部が、また両学部をつなぐB街区には共通部門を中心とした各施設が立地してゆく想定されます。



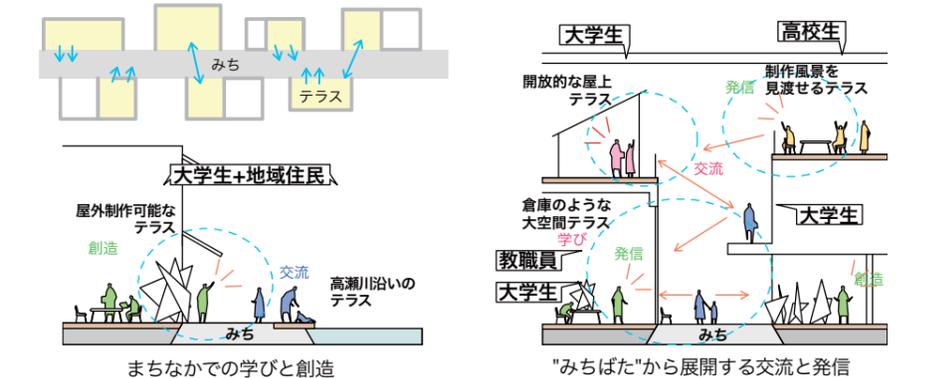
＜特色をもった多様な場が立体的に点在する＞

■ : 美術系に関連するテラス ■ : 共通部門に関連するテラス ■ : 音楽系に関連するテラス

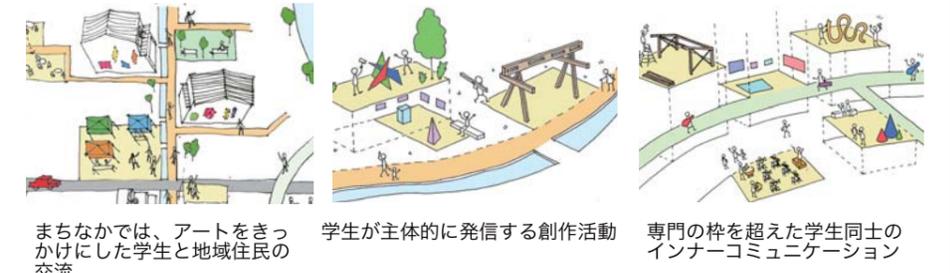
“交流と発信”のフレームワーク ~出会いをつくる~

- 多様な関係主体が交流・発信する“みちばた”づくりは、大学内にとどまらず地域全体に拡張可能なスケールを持つ仕組みです。
- “みち”を歩くと、高校生と大学生、教職員や地域住民など多様な出会いがあり、創作活動や練習風景を背景にみちばたの交流が生まれます。

＜“みち”とテラスがつくる、“みちばた”のつながり＞



＜みちばたに生まれる交流と発信＞



4つのフレームワークに沿って、実践的な計画案へ ~「知と創造のコア/火床」「十字路としての芸術大学」に向けて~



キャンパスストリート: 大学の活動や賑わいがにじみ出し、新しい風景をつくる。生まれ変わった堀小路通

キャンパスモール: 高瀬川に沿って延び地域や世界につながる“外のみち”

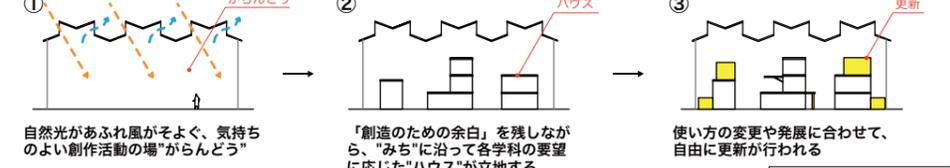
キャンパスギャラリー: A,B,C街区を立体的に横断し美術と音楽を結び付ける“内のみち”

“成長と更新”のフレームワーク ~自らの手で大学をつくる~

- 使い手とプロセスを共有・協働しながら、キャンパスの中にキャンパスを張るように実践的な制作を通して、現在進行形の活動の場所をつくり出していきます。
- 様々なアーティストの作品制作や展覧会場構成を行ってきた建築ユニットであるドットアーキテクトが中心となり、キャンパスの“営繕課”のように継続して更新を行っていきます。
- A・B街区とC街区それぞれの建築の特性を活かし、大学の成長に合わせて段階的に、自由に更新を行うことができます。



＜C街区の自由な成長と更新を可能にする仕組み：“がらんどろ”と“ハウス”＞



① 自然光があふれ風がよく、気持ちのよい創作活動の場“がらんどろ”

② 「創造のための余白」を残しながら、“みち”に沿って各学科の要望に応じた“ハウス”が立地する

③ 使い方の変更や発展に合わせて、自由に更新が行われる

テーマに対する技術提案

テーマ②: 新たなキャンパスの具現化に向けて → 不変のスケルトンと、様々な人々が参加して変化し続けるインフィルから構成された、時間軸を内包する自由な建築を提案します。

■100年後を見すえた、大胆なスケルトン&インフィル建築の提案

- ・C街区では頑丈で大らかなスケルトンが、多様な芸術活動を長期にわたって支える“がらんどろ”のような大空間をつくります。
- ・“キャンピング・アジール”と名づけたインフィルは、キャンパス(campus)の語源ともなったキャンプ(camp)のように軽やかな材料と構法でつくられた多様な“ハウス”群によって構成されます。



平行する2本の“みち”に沿って配置された、地域住民も気軽に利用できる学食や図書館。

“キャンパスギャラリー”(大路)に直交する“専門の小径”(小路)と、変化成長するアトリエ

夜間も自由に通り抜けが可能なキャンパスモール

お地蔵さんや祠は、元もあつた同じ場所か、可能ならぎりぎり近くにお祀りし直します。



塩小路高倉の交差点から見る。みちを歩くように、自然とキャンパスモールに引き込まれる

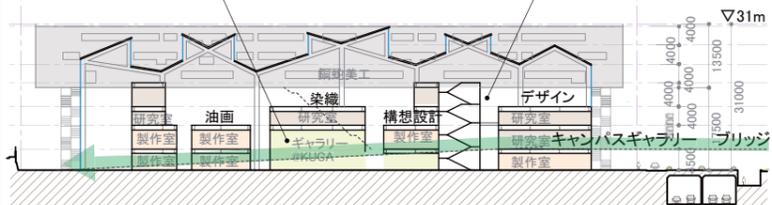
“キャンピング・アジール”。時代の変化に応じて更新され、竣工後も成長し続ける柔らかなインフィル。

学生や教職員、地域住民にとって共通の“記憶の器”となる“がらんどろ”。

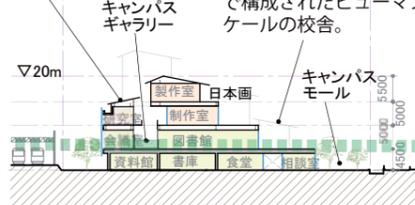
東西に長い壁をつくらなように低く抑えたスカイライン。

高瀬川に向かって段々と下るテラスと、直射光の入らない落ち着いた北向き居室で構成されたヒューマンスケールの校舎。

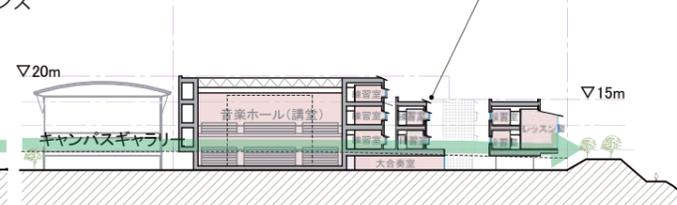
鴨川に向かって雁行配置された南北に細長い校舎群。



C街区東西断面イメージ s=1/1500



B街区南北断面イメージ s=1/1500



A街区東西断面イメージ s=1/1500



オープンスペースにもあふれ出す学生たちの活動

災害時には地域の一時避難場所ともなる開放的な“みち”空間。

新しい創造を生むいくつもの交差点

大学校舎内を貫く開放的なキャンパスギャラリー

学びと創造の拠点となる“キャンパスギャラリー”。銅駝美工への大階段が、生徒と学生の交流を促します

■明快な機能ゾーニング

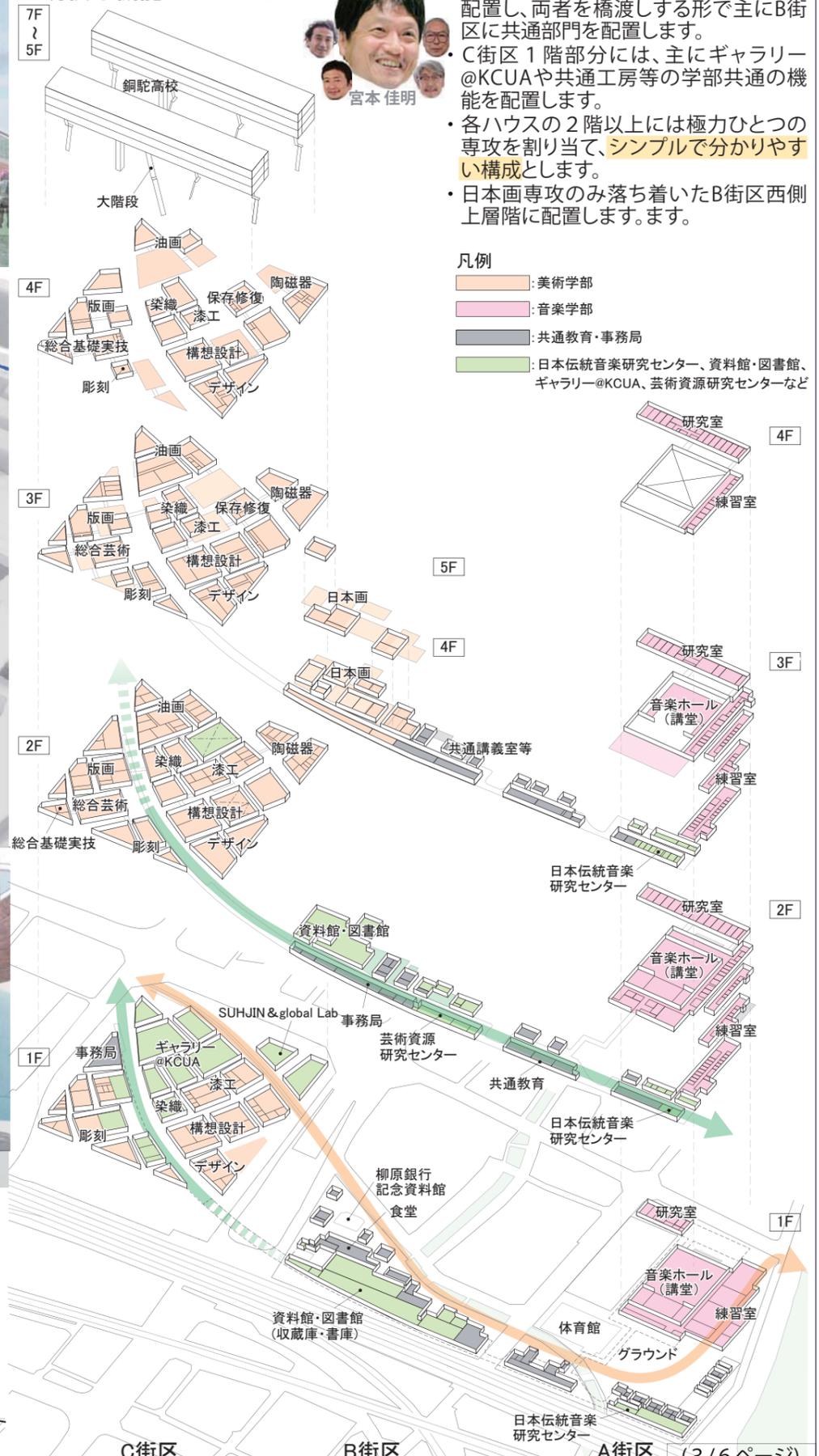
- ・A街区に音楽学部、C街区に美術学部を配置し、両者を橋渡す形で主にB街区に共通部門を配置します。
- ・C街区1階部分には、主にギャラリー@KCUAや共通工房等の学部共通の機能を配置します。
- ・各ハウスの2階以上には極力ひとつの専攻を割り当て、シンプルで分かりやすい構成とします。
- ・日本画専攻のみ落ち着いたB街区西側上層階に配置します。



宮本 佳明

凡例

- 美術学部
- 音楽学部
- 共通教育・事務局
- 日本伝統音楽研究センター、資料館・図書館、ギャラリー@KCUA、芸術資源研究センターなど

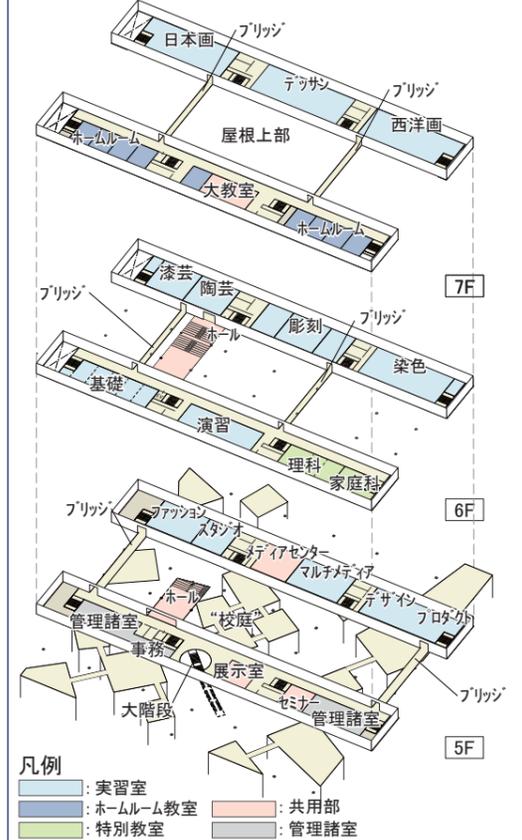


テーマに対する技術提案

テーマ②: 新たなキャンパスの具現化に向けて → 鴨川、高瀬川の景観を活かしつつ、音楽・美術・高校が連携し合い、多様な“知の拠点”が地域や世界に向けて発信・交流する大学を目指します。

■大学を“校庭”とする銅駝美工

- ・キャンピング・アジールを見下ろす場所に独自の空間領域を確保することにより、“がらんどう”を媒介にして大学との創作・展示活動の相互浸透を図ります。
- ・キャンパスギャラリーから銅駝美工へのメインアプローチとなる大階段が、生徒と学生の交流を深めます。



■景観特性等を踏まえたキャンパスデザインについて



大学構内を流れる高瀬川と、地域住民と学生が創作や演奏を楽しむ“キャンパスモール”



キャンパス外に広がるアート活動

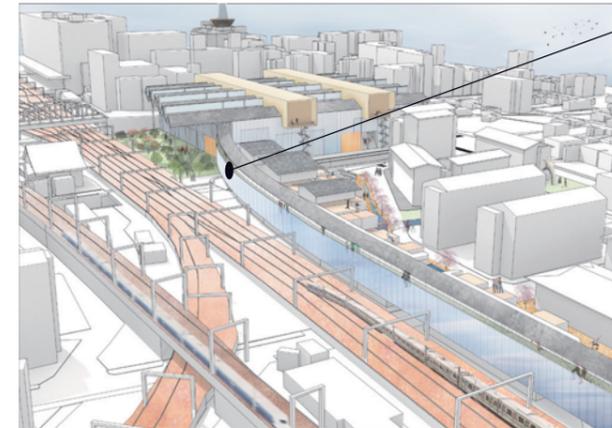
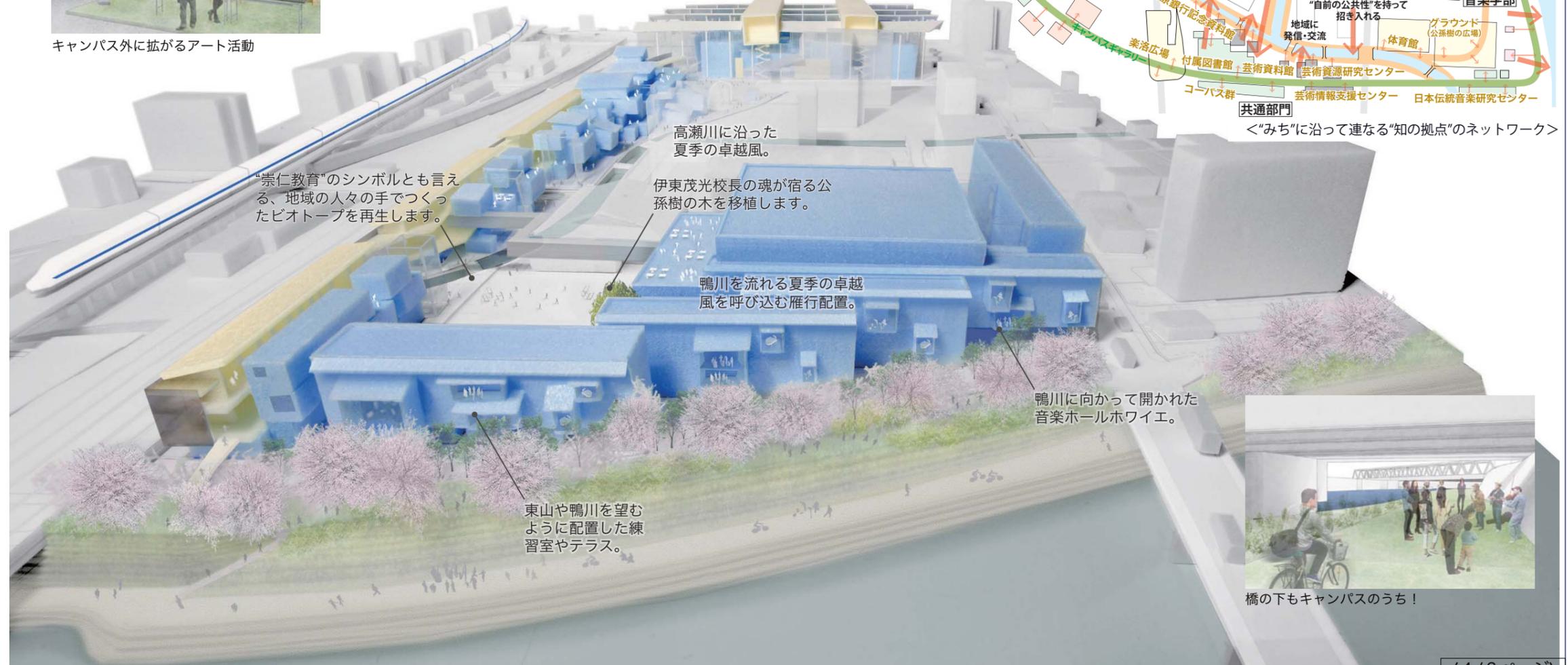
- ・鴨川、高瀬川といった景観資源と相互に高め合うデザインを目指します。
- ・JR、特に新幹線からの移動する視線を意識して、共通部門南面は緩やかな弧を描きます。



“キャンパスストリート”（塩小路通）や鴨川ににじみ出す音楽学部の活動

■音楽ホールやギャラリー等の交流・発信スペースのあり方について

- ・平行する2本の“みち”が“知の拠点”を串刺しにし、リニアに伸びた「コア」をつくります。



JRの騒音から高瀬川沿いの静かな環境を守る遮音壁の役割を果たす南面

*道路の上空に設ける通路について

- ・現在、京都市建設局土木管理部道路河川管理課と協議中です。
 - ・本来幅員16m超の道路上空には通路を設置できないため、河原町通を横断するブリッジが問題になるところです。しかしながら、以下の理由から許可となる可能性が高いと判断しています。
- ①河原町通アンダーパス部（本線）には楽洛広場のスラブが被さっており、道路管理上は側道と一体の道路とは見なし難い。
 - ②歴史的にも、東側側道とされている道路は、河原町通とは別の道路であった。現在でも両者の間には楔形の空地が残る。



“みち”に沿って連なる“知の拠点”のネットワーク

テーマに対する技術提案

テーマ③:品質・コスト・スケジュール管理について

コストおよびスケジュールの管理方法



宮本 健二
宮本設計

■イニシャルコストの低減

- 仕上げの豪華さではなく、空間の質によって豊かな建築をつくることを目指します。
- 鉄骨造の採用によって、コストの合理化と工期短縮を図りながらダイナミックな空間構成を実現します。
- スケルトン(重量鉄骨)とインフィル(軽量鉄骨)を分離した構造システムを有効に活用し、建設コストを抑えます。

■きめ細かなフェーズ設定によるコスト管理

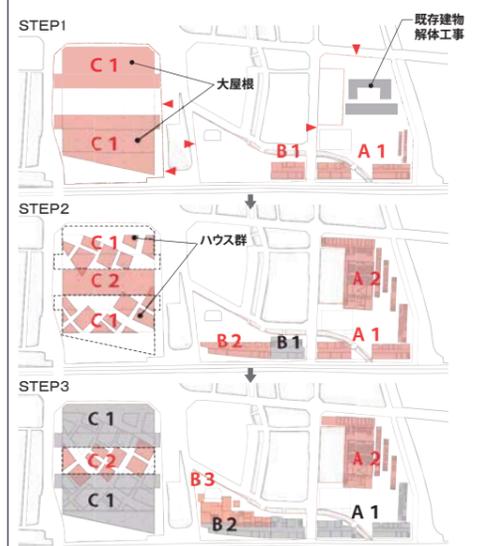
- 基本設計/実施設計の各々の期間内に躯体/仕上げと二度のチェック期間を設け、段階的なコスト管理を行います。早期にコスト把握に着手することにより、手戻りなくスムーズな入札・着工へとつなげます。
- 設計の進行にともなう大学側ニーズの変更にも柔軟に対応しながらコスト管理を行います。

■ランニングコストの低減

- 街区毎に適切な環境負荷設定を行い、ランニングコストの低減を図ります。
- 自然換気/自然採光/LED照明/太陽光発電パネル/地下水、雨水利用、節水型衛生器具/空調機計画等が低減対象項目となります。

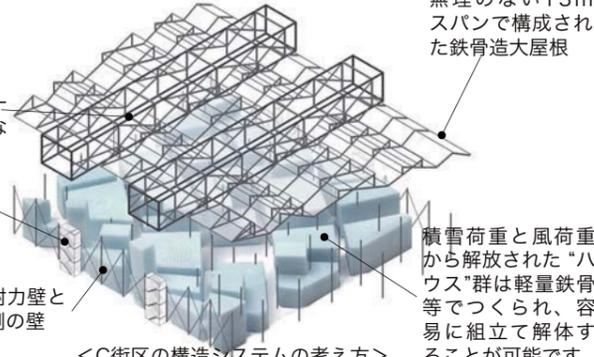
■設計工程管理および工事計画について

- プロジェクトマネジメント専任担当者を配置し、設計期間の中で短スパンの目標達成出来高を設定して、着実な工程管理を実現します。
- 各街区を2~3の工区に分けて、進入口等の条件に配慮しながら効率的に工事エリアを移動することにより、確実に工期内に工事を完了する計画とします。



＜建築物の性能確保のための技術提案＞ → 日常の使い勝手から安全性、エネルギー、学習環境など多様な項目について、建築を利用形態に合わせてその都度セットアップすることができる、柔軟性を持った性能確保を目指します。

安全で更新可能性を考慮した構造計画



無理のない13mスパンで構成された鉄骨造大屋根

銅製美工を構成するチューブ構造が東西方向の主要な水平抵抗要素となります

バランスよく配置された垂直コア

南北方向の耐力壁として働く平側の壁

積雪荷重と風荷重から解放された“ハウス”群は軽量鉄骨等でつくられ、容易に組立て解体することが可能です

＜C街区の構造システムの考え方＞

京都らしい親自然的な環境制御システム

- 敷地が持つ豊かな環境ポテンシャルを利用(太陽光、自然風、地下水)して、季節や活動に応じた多様な微気候を建物内につくります。
- 利用状況をモニタリングし施設間でエネルギー融通を行うエネルギー・フィードバックシステムを導入します。

＜キャンピング・アジールの自然通風解析＞

＜キャンピング・アジールの光環境解析＞

“がらんどう”に夏季の卓越風を呼び込む

採光・通風・排熱を担うハイサイドライト

明るく風通しがよい開放的な微気候

太陽光パネル

大屋根のよる日射遮蔽

鴨川系地下水の多段階利用(冷暖房→雑用水→灌水)

地下水直接利用による床輻射冷暖房

浸透と灌水再利用を併用した雨水処理

ハウスの間を流れる微風

ほどよい明るさと穏やかな風の微気候

（夏季昼間想定。南南西風1.7m/sの場合のFL+1.5mでの風速）

（晴天時15,000lxの場合の床面昼光率。昼光率4%で照度600lxとなる）

キャンパスギャラリーで600lx程度、路地底でも300~450lxと、作業に十分な照度が得られます。

小さな庭のネットワークがつくる大きなランドスケープ

- 地上絵を一気に描くようなランドスケープではなく、小さな庭の連続によってキャンパス全体が“京都の庭”として立ち現れる風景づくりを目指します。
- “庭”のフレームワークに従って、各々の“terrace”に相応しい1畳、4畳半、10畳といった小さな庭を京都の庭師と協働して作り上げます。
- 個々の庭が集合し、京都の玄関口となる場所にまるで盆栽棚のような多彩なランドスケープをつくります。

里から山へとグラデーションした樹種が変化する庭

花:ウメ、モモ、ボケ、ツツジ
落葉樹:コブシ、ヤマザクラ、イヌタデ、モチツツジ
常葉樹:アラカシ、ツタ、タモ

1畳から10畳までの小さな庭群

季節の移ろいを感じる庭

内露地

外露地

モミジ/サクラ

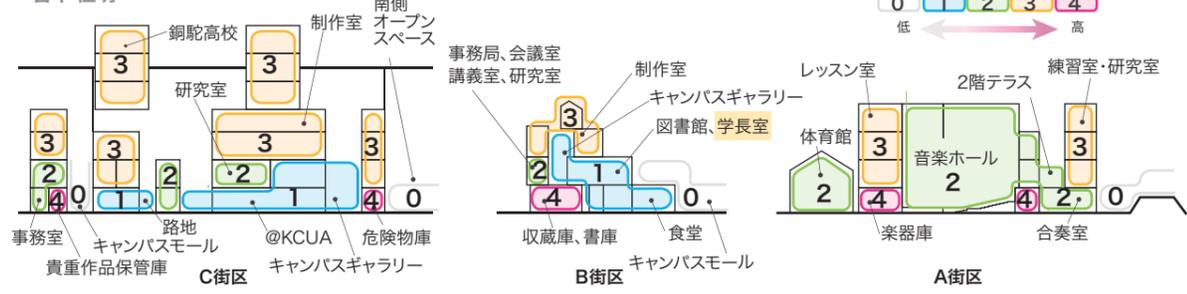
秋:モミジ、銀杏

春:サクラ(既存)

高瀬川

鴨川

大学全体を開きつつ、一方で必要なセキュリティを確保するための計画



セキュリティレベル: 0(低) ~ 4(高)

制作室、研究室、事務局、会議室、講義室、研究室、レッスン室、2階テラス、練習室・研究室、音楽ホール、合奏室、楽器庫、体育館、図書館、学長室、キャンパスギャラリー、倉庫、書庫、食堂、貴重作品保管庫、@KCUA、危険物庫

宮本 佳明

- エリア毎の条件に応じて管理レベルを段階的に判断し、明快なセキュリティ区分を設定します。
- 具体的には『移転整備基本計画』に提示されている4段階のセキュリティイメージに従って、下記のセキュリティラインを想定しています。
- さらに、地域に開かれた大学を目指して、安全と判断できる範囲内で夜間にも一般の利用が可能なレベル0のエリアを設けています。

将来的に大学校舎を更新する際の防災計画



安宅防災設計

- C街区について、大屋根下の共用空間(“がらんどう”)は、屋根面と壁面に十分な自然排煙口を確保可能であることから「屋外同等の開放性」を有すると判断できます。
- 避難安全検証法の大臣認定を取得し、“がらんどう”に対する縦穴区画を適用除外とします。
- 事前に“増改築ルール”(チェックリスト)を定めておき、将来的に大学校舎を更新する際には、避難安全検証法が定める「あらかじめの検討」によって認定可能範囲を判定します。
- “がらんどう”内に建つ個々のハウスの増改築については、内容と頻度に応じて以下の4種類を想定しています。

***“増改築ルール”の例**

- 避難に必要な路地幅員を確保する。
- 増改築部の用途については既存部と同種とする。
- 不燃材料を使用する。
- 搬出入車両の通行と日照の妨げにならない範囲内で、空中権は自由に利用可能とする。
- (仮称)アジール運営委員会での承認を必要とする。

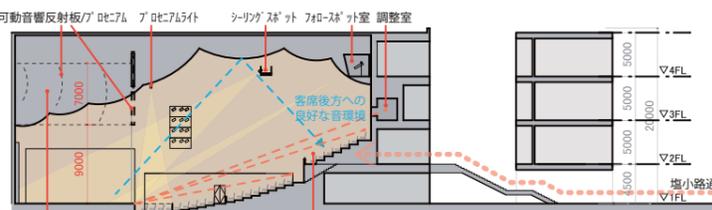
想定① 建築行為に該当しない仮設小屋、展示ブース等の設置
常設のキャンビー、天蓋等、床面積の変更をともなわない増築
頻度:年に数回のイメージ
施工方式:ドットアーキテクツや京芸学生を中心としたセルフビルド
建築基準法上の位置付け:確認申請は不要。ただし、“増改築ルール”により安全性を自主的に確認。

想定② 内装の改修(ハウス内での間仕切り壁等の変更)
頻度:数年に一度のイメージ
施工方式:ドットアーキテクツを中心としたセルフビルド

想定③ 小規模の増築(ハウス外に小屋、テラス、ブリッジ等の増築)
頻度:数年に一度のイメージ
施工方式:ドットアーキテクツを中心としたセルフビルド
建築基準法上の位置付け:確認申請が必要。“増改築ルール”により安全性を確認した上で、ルールの範囲内で増築を行う。

想定④ ハウスの建て替え
頻度:20~30年くらいに一度のイメージ
施工方式:通常の発注方式による工務店施工
建築基準法上の位置付け:確認申請が必要。“増改築ルール”から外れるものについては、再検証(大臣認定再取得)を行う。
確認申請が必要。避難安全検証については再検証(大臣認定再取得)を行う。

音楽ホール等の音響・防音計画



可動音響反射板/0x7L、プロセニアム、シリング、スポット、フェロ、スポット室、調整室

音響と舞台視認性を重視する7/20~7/客席

伊藤 正示 (シアターワークショップ)

福地 智子 (永田音響)

- 音楽ホールは学生の日常利用を重視しつつ、本格的な公演にも対応(音響反射板~プロセニアム使用)できるよう、容易に音響可変と舞台転換が可能な仕様とします。
- 舞台フライズはオペラ演目のセット吊り込みに対応すると共に、本格的な舞台照明と舞台音響が可能な計画とします。
- 客席配置は、舞台との一体感を重視して、短い視距離と豊かな音場を持つ構成とします。
- また音楽系各室は、浮遊音構造と固定遮音構造を必要に応じて使い分け、部屋間や周辺に対する遮音対策を行います。

